

## 論文審査の結果の要旨

氏名：金 澤 朋 子

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：飼育下マレーバクの成長に関する生理学的小および行動学的研究

審査委員：（主 査） 教授 村 田 浩 一

（副 査） 教授 長谷川 功 教授 甲 斐 藏

本論文は、IUCN のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているマレーバク (*Tapirus indicus*) の域外保全を達成させるため、飼育下繁殖に必要な科学的情報の蓄積を行うことを目的としている。研究内容は、出生直後から 1 年間にわたり本種の仔の体重および体表模様ならびに行動変化を記録するとともに、泌乳期中の乳成分やホルモン変化を解析し、長期飼育下繁殖計画に有用な成長過程を明らかにしたものである。すなわち第 1 章では、本種の飼育記録および飼育園館から得られた情報を基に、国内の飼育頭数の変遷および繁殖に関わる問題を解析している。その結果、国内出生仔の内、次世代の繁殖に参加した個体は 44.9%に過ぎないことが判明し、より多くのペア形成が国内繁殖の鍵になることを提示した。第 2 章から第 5 章までは、出生仔を対象として出生後 1 年間の生理学的小および行動学的変化に関する研究が記されている。本種は、成長に伴い体表模様が著しく変化する種であるが、本研究では出生後 3.5 ヶ月で成獣と変わらない外見になることが認められた。その後、1 日の 6 割を吸乳や摂食、移動などの活動が活発となり、さらに吸乳よりも摂食の日内割合が多くなることが明らかにされた。また、著しい体重増加等の身体的な成長が同期間に認められた。このことから、本種は成獣時の外貌を呈した後に、行動や身体における変化の起きることが判明した。第 6 章および第 7 章では、泌乳期中の乳試料を用いて母親の内分泌的变化が解析されている。その結果、早い個体では出産後約 3 ヶ月で繁殖機能が回復し、4.5 ヶ月で泌乳の終了時期を迎えることが示された。そのため、仔が生理学的小にも行動学的にも著しい成長を遂げる時期とほぼ同時期に、母親が妊娠可能な状態になることが明らかにされた。また、仔の吸乳刺激が母親の繁殖機能の回復時期に影響することも本研究結果から示唆された。以上のことから本研究は、出生仔の成長発達に伴う仔および母親の多面的な変化を明らかにし、今後の本希少種の長期飼育下繁殖計画を再構築する上で有用な科学的情報および具体的提案となっている。

よって本論文は、博士（生物資源科学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 26年 1月 22日